

冷戦後も増える難民数

冷戦が終結した時、誰もがこれですべて平和な時代が来ると歓迎した。しかし、この期待は見事に裏切られた。冷戦の終結で少しも紛争が減らないことが明らかになったからだ。とくに増えたのは異なる民族間の内戦とこれに伴う大量の難民発生である。

「内戦に負けることはすべてを失うことに近い」と言われるため内戦は激しいものとなりがち。これに排他的になりやすい民族問題が絡むとますます激しくなる。旧ユーゴでも四百三十万人の難民が発生しているが、最近国際社会が不意をつかれたのはアフリカのルワンダ内戦である。多数派フツ族に属する大統領暗殺（四月六日）直後、フツ族過激派が対立する少数派ツツ族を虐殺し始めた犠牲者は五十万人以上にのぼった。残酷な殺害の模様を執ように伝える外国の衛星テレビ映像は改めて人間の「獣性」を思い知らせてくれた。この獣性がいつどこで爆発するか知れないのが冷戦後の世界だともいえる。

ルワンダではこの混乱に乗じてウガンダに拠点を置くツツ族主体の反政府武装組織・ルワンダ愛国戦線（RPF）が攻勢に

オピニオンアップ

出、領土の大半を制圧して新政府を樹立した。最初はツツ族が国外に逃げ出していたが、RPFの優勢が明らかになるにつれて今度はその報復を恐れるフツ族が大量に国外に逃げだした。その数は二百万以上になった。

このほか人道的保護目的で六月に介入したフランス軍がルワンダ国内に作った「安全地域」にもたたくさんの国内難民がいてルワンダは人口七百五十万の半分近くが難民というひどさ。さらにこの難民の間にコレラ、赤痢

安定さを映しだす鏡である。必要な仏独和解の知恵

多発する民族紛争に歯止めをかけ難民の流出を防ぐため、冷戦後の新たな秩序構築が急がれるがまだトンネルの出口は見えない。国連による平和の道も模索されているが、現在の国連にはとても秩序を生みだし維持するような力のないことが露呈されつつある。それにいつたん血の流れた対立・紛争の解決は容易でない。理性が失われ感情が

薄い日本人の人道的関心

求められる「迅速」な対応

がまん延して数万人の死者を出し悲惨さに輪をかけている。世界の自国外に出た難民数は一九七四年二百四十万人だったのが、八四年五十五万、九二年千八百五十万と増え、現在は二千三百万人。これに国内難民二千六百万人を加えると四千九百万人にもなり世界の人口百三十四人に一人が難民ということになる。九二年にはこれが百三十人に一人だった。冷戦終結後も急速に難民の増えていることがわかる。この難民の数は世界の不安

定さを映しだす鏡である。必要な仏独和解の知恵

要だったように世界中の民族紛争の和解達成には息の長い忍耐と努力が必要なのに避けない。この過程で日本もできることは何でもやらなければならぬ。世界に紛争が広がったり頻発して日本だけが平和で繁栄ということは何り得ないからた。

それにして日本人には貿易で稼ぎ海外旅行が増えているのは奇妙にも対照的に、片隅の平和を願う孤立主義的メンタリティーが依然として強い。国際貢献を口では大きく唱えなが

隊による人的貢献も評価できるが、もっと迅速にやれないものかと思う。一息ついてからより、もがいている時に来てくれた方がどれだけありがたみが増すか知れない。

問われる日本人の意識

それに一般の関心も低い。日本のNGO（非政府組織）ではアジア医師連絡協議会、赤十字などからごく少数の医療関係者が現地にはいったのだが、フランスの場合は悲劇が始まった四月の段階から医療チームが現地でも活動している。さらにコレラ発生が明らかになって七月二十一日に「国境なき医師団」が現地医療活動参加をフランス国内で呼びかけたら一週

間で三百三十人の医師、二百一十人の看護婦から申し出があった。パリの同医師団本部に電話を入れて聞いてみると同医師団派遣の医療関係者だけで現在約四百人が現地において、このうち約百五十人がフランス人だとい

う。

アフリカは日本から遠く、歴史的なつながりも薄い。これに對してフランスは歴史的関係も利害関係も日本より強く簡単に比較はできないが、それにしても人道面への関心があまりに遠いすぎる気がする。フランスは人権思想を生み、「国境なき医師団」「世界の医師団」を生んだ国である。内政不干渉の原則に風穴をあける。干渉の権利を提唱し定着させてつあるのもフランスである。さらにこの権利を一步進めた。干渉の義務も唱え出している。国際的な難民救援活動の第一線で活躍する緒方貞子・国連難民高等弁務官も救援活動への日本のNGO参加の少なさを嘆き、世界が苦勞している時に何かをしなければならぬという意識を持つことの重要性を訴えている。日本にも、義務」という感覚が芽生えるかどうか、またしても日本人の意識が問われている。

何を好んでアフリカくんんだりまでと思う人もいるだろうが、こうした援助に時期を失せず適切に対応することで、世界の日本を見る目が変わってくるのだということをお忘れはならない。日本は孤立しては生きていけない国だからである。

論説副委員長

塚本 一